

鍛冶の技

知多の鍛冶は、その中心が大野（現常滑市北部）であったことから大野鍛冶といわれた。江戸時代には、地元において営業を行う居鍛冶と、三河や美濃、信州など他地域へ出向いて、農具の製作や修理にあたる出鍛冶の両者が存在し、いずれも優れた技を誇っていた。「大野のヒルに足を食いつかれた」と農民が大野鍛冶を表現する。これは、農民が鍬で足を切った時に出てくる言葉で、それほど大野鍛冶の製品はよく切れた。

● 鞆……柄を押し引きして、火床（火をおこし、鉄をわかす炉）に風を送る装置。

● 大槌……先手職人（子方）が用いた。

● 小槌……親方の使う槌。修理・製作する品物の種類や部分によって数種類あり、巧みに使い分けた。親方は横座で作業を行い、左手に品物を挟んだはしを持ち、右手で小槌を振るった。

● 金床……鉄を鍛える台。鍛え上げた鉄は、とぶねの水で焼を入れた。

● 巣床……空いた穴に、えんばならし、角ならし、鳥口などをさし込み、その上で小槌を使って細工や調整を行った。

● はし……鉄や農具などの品物をはさむ道具。いろいろな形があり使いやすいものを用いた。はしで挟んだものは、はし輪をはめて固定した。

● ひらぼり…火床の炭をならし、火の加減を調節するもの。

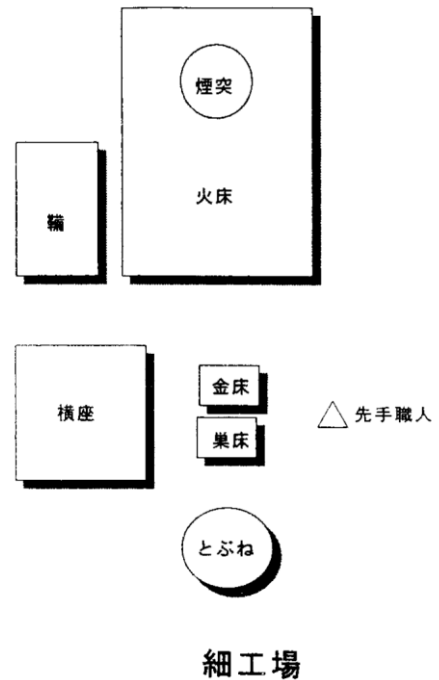
● カスとり…火床に溜った金くそをさらえるのに用いた。

● 水ぼうき…鍛えた鉄に水をうち、表面に錆を浮かせる。浮き出た錆は、槌で叩いて取り除いた。

● カネパス…寸法を測る道具。

● 刻印……自作の製品に印を付け、目印とした。

● 縁起物……毎年の仕事始めに作り、細工場の柱に打ちつけた。



造瓦の技

瓦造りは、土づくりから始まる。土に水をかけ、足で踏んでは柔らかくし、薄く伸ばす。それを積み重ねては、隙間が出来ないように足で踏むことを繰り返す。こうして出来上がった土を瓦の大きさと厚さに切り、木型にのせて成形し、乾燥させた後、窯で焼いた。

原料となる土は、近くの田んぼから採ってきた。瓦に適した土を冬場に掘り出して、土場へと運ぶ作業は大変な重労働で、冬の間中行われた。

●手桶……………土づくりにおける水かけに使う。

●備中鍬……………土を練り合わせ時に用いる。

●柄鍬……………足で踏んで柔らかくなった土は、柄鍬で薄い板状に切り、適度な大きさに踏み固める。これを積み重ねては足で踏むことを繰り返して、たたらをつくる。このたたらから、針金を使って瓦1枚分の粘土板を切りとり、荒地型にのせる。

●木型……………瓦の種類ごとに木型があり、同じ瓦でも作業工程によって荒地型、切型、磨き型がある。剣の木型は、軒瓦の垂れの部分に使用するものであり、巴の木型は、巴瓦に用いる。

●なで板……………荒地型にのせた粘土板の表面を均一にならし、なめらかにする。こうして出来たものを荒地と呼ぶ。

●たたき……………瓦を叩いて整える道具であり、荒地を叩くものと、磨くときに用いる磨きだたきがある。

●丸鎌……………切型に荒地をのせ、型に沿って切り、瓦の形を整える。

●こて・へら……………磨き型にのせた瓦を磨く道具。瓦の種類や部分によって、大きさや形に違いがある。

●くし……………瓦の裏に筋をつけるのに用いる。

●瓦焼きについて

昔はダルマ窯と呼ばれる窯で、1,000枚ほどの瓦を一度に焼いた。燃料には薪や石炭を使用した。煙が出ることから、瓦屋は大体、村外れに位置していたという。

